

## 【 木枯らしの訪れ間近 】

今年の10月前半は台風21号が東日本を縦断し暴風と大雨で、各地に大災害をもたらした後、前線の活動が活発となり秋霖の季節になった。これに続く後半の主役は澄み切った秋晴れと、初冬へのプロローグとなる木枯らしやおろし(凧)であろう。

気象庁が定めている**木枯らしの定義**は「10月半ば頃から11月末日までの間に、西高東低の冬型気圧配置となり、風向きが北～西北西の間で最大風速が毎秒8メートル以上吹き、気温が前日より3度以上下がるとき」となっている。

木枯らしが真冬の冬型と異なる点は、一時的に猛烈な北風が吹いて寒くなるが、一転して、翌日は大陸の移動性高気圧による穏やかな小春日和になることである。

次に、**おろし**と呼ばれる強い風は、局地的な地形性の風で、風下側の斜面が急角度になっていて、斜面の下部が広い平野か水面の場所で発生しやすい。局地風であるおろしには、それぞれの土地固有の名称がつけられ、関東地方の「**赤城おろし**」、関西では阪神タイガースの応援歌でおなじみの「**六甲おろし**」などがある。

さて、これから訪れる寒さの一つに「**風冷え**」がある。強い風が吹くと、人の体の表面の温まった空気の層が吹き払われてしまい、実際の気温よりも寒く感じる(体感気温という)。

農作物などでは、葉や芽の部分の水分が奪われるため注意して欲しい。

風冷えの現象は真冬に多いが、どちらかといえば、未だ寒さに身体が馴染みきれていない、晩秋から初冬に訪れる木枯らし1号の頃の方がぴったりする。

( 気象情報システム株式会社 高 津 敏 )